

明治維新の日英言語接触  
——横浜の英語系ピジン日本語（1）——

Language Contact between Japanese and English in the  
Meiji Restoration: English Pidgin Japanese in Yokohama

杉本豊久

0. はじめに

明治維新の直後、1879年に *Exercises in the Yokohama Dialect*.<sup>1)</sup> なる日本語教則本が横浜で出版された。これはその頃、横浜に流入する外国人向けに横浜在住の日本人とのコミュニケーションのために編纂されたもので、この中に当時の横浜で使われていた英語系ピジン日本語の一端を垣間見ることが出来る。本稿では、この教則本の調査分析を通して、当時横浜で使われていた英語系ピジン日本語の具体的特徴を明らかにし、現在世界各地で使われている英語系ピジン・クレオールに共通した普遍的特徴がみられるのか、またさらに横浜での英語系ピジン日本語独自の特徴の実態などを明らかにしたい。

1879年といえば、ペリー来航（1853）に始まり、日米和親条約（1854）、大政奉還（1867）、戊辰戦争（1868）、廃藩置県（1871）、西南戦争（1877）と続いた明治維新といわれる一連の出来事がひと段落した直後であり、これから横浜で商取引をしようとする人々をはじめとして、船舶所有者、古物商人、競売関係者、競馬用の厩舎の所有者、宣教師など、様々な外国人が横浜で活躍していた時期である。

この教則本は、そのような外国人が横浜にいる地元の日本人たちとコミュニケーションを図る際に必要な日本語を効果的に習得するために編ま

れたものと考えられる。彼らはこれを用いて簡単な日本語を覚え、実際には英語との混成語、即ち、「英語系ピジン日本語」ともいべき言語形式を用いて、コミュニケーションをしていたと考えられるが、序文でも自ら指摘しているように、あくまで実用主義に立った教則本であり、学問的に正確を期するという性質のものではない。著者自身が序文で次のように述べている：

「この書物が言語学の文献として大きな足跡を残すことになったなどは、著者も改訂者も考えてはいないが、偉大な先人やその後継者たちが、日本語学習者たちに害を及ぼすことはなかったのと同様に、これらも学習者にとって害とはならなかったのであれば、その高い目的は大いに達せられたということになるであろう。」（「序文」5頁、筆者抄訳）

また、改訂版の序文でも、改訂増補を担当した the Bishop of HOMOCO<sup>2)</sup> は、次のように述べている。

「私はヘボン<sup>3)</sup>をはじめとする、現代の日本語の辞書編纂者たちが夢中になっているような、もっと詳しく複雑な文法項目にまで立ち入る必要性はないと考えている。というのも、私は日本での長期にわたる滞在経験から、地元語に精通している Grigor 流<sup>4)</sup> の方言がすべての知的な現地の人々によく理解されているし、あらゆる階級の外国人によっても良く使われているからである。」（「改訂版への序文」9頁、筆者抄訳）

しかも、同時に横浜の一般人が使っている日常語を特に重視している点に注目したい。

「この小冊子が、実際に使われているすべての語彙を網羅しているわ

けではないが、ここに記述されているもので実際に使われていない語彙はないはずである。(一般に専門の教師や書物によって教授され)、現実には一部の人たちにしか理解できないような“侍方言”を、困難な勉強を通して習得するよりは、横浜で実際に日常使われている方言を理解することのほうが有益であることは明らかである。(「序文」5頁、筆者抄訳)

当時の欧米人と横浜の日本人との間で実際に交わされていた実用的な英語系ピジン日本語の一端を窺くするには、公共の教育機関で作成されたものよりは、むしろこの種の文献のほうが望ましいのかもしれない。本書全体に、庶民感覚での日常表現が満ち満ちているからである。

### 1. *Exercises in the Yokohama Dialect.* の内容構成

この教則本は、“Revised and Enlarged Edition”とあるので、数年前に出版された初版本を改訂増補したものである。全体が1課～5課で構成されており、最後に2種類の練習問題と「南京風(中国風)日本語表現(Nankinized-Nippon)」という章が収録されている。1課～5課の具体的内容はおおむね次の通りである。

1課：代名詞(Watarkshee / Watarkoosh, Oh my, Acheera sto, etc.)、身近な普通名詞(Caberra mono, Tempo, Mar, Mar key, Boto, Oh char, etc.)、代名詞＋名詞表現(Acheera sto caberra mono, Oh my tempo, Watarkshee mar, Oh my oh char, etc.)、多義多用法動詞(Arimas, Piggy, etc.)、その他の動詞(Champone, Serampan, etc.)、Arimasを用いた疑問文(Mar arimas?)、命令文(Mar piggy)、挨拶表現(Ohio, Sigh oh narrow, etc.)、応答表現(Sigh oh, Nigh, etc.)、日常用語(1)(Hontoe, Ooso, Moods, eashey,

Todie-mar, etc.) 等。

- 2 課：否定文 (Arimasen, Walk-arimasen, etc.)、多義多用法動詞 (Arimasen / Walk-arimasen / Aboorah, etc.)、会話用語 (判断・数量) (Your-a shee, Worry, Tack san, Skoshe, Cheese eye, etc.)、数詞 (Stoats, Stats, Meats, Yotes, It suits, Moots, Nannats, Yachts, Cocoanuts, Toe, etc.)、日常用語 (2) (Nang eye, Tokey, Sto, Moose me, Baby san, Boy, Come here, etc.)、文での応用 (Kooroy arimas, Hanash arimas?, etc.)、疑問文・応答文 (Nanny tokey arimas?—Cocoanuts arimas.)、買い物表現 (Aboorah ickoorah?)、各種会話表現 (Meeds motty koy, aboorah doko?, etc.) 等。
- 3 課：より広い生活域での用語 (Oh terror, Boto motty koy, etc.)、様々な職業や仕事上の用語・表現 (Start here, Num wun sindoe doko?, Boto piggy, etc.)、飲食物 (Chobber chobber, Kashy, Beer sacky, Pan, etc.)、家庭 (Sacky maro maro, Coots, etc.) などの日常用語 (3)、等。全体にわたって大部分が会話表現で構成されている点が1～2課とは異なる。
- 4 課：交通手段(人力車・馬関係の用語) (Kooromar, Bashaw, Gin ricky-pshaw, etc.)、料理 (Kooksan, para-para, Oh you, Yakemas, Tory, Eemo, etc.)、洗濯 (Shabone, Kimmono, etc.)、住居 (Mon, Toe akemas, Mado, etc.)、天候 (Sammy, Atsie, etc.)、職業 (Bosan, Yakkamash shto, Doctorsan, etc.)、その他の日常用語 (4) (Akindoe, Dyke oh, Eejin san, She buyer, etc.)、等。3課で学んだ会話表現を応用できるように、もっぱら語彙の補強にあてている。
- 5 課：会話文のみで構成されており、様々な文脈に応じた発話スタイルが解説入りで盛り込まれている。場面が設定され、その状況に応じた一連の会話のやり取りのモデルが提供されている。例えば、

古物商を訪れた欧米人が、日本人の店主と交わす次のようなやり取りのモデルが示されている。

【具体例】

《英語》	《横浜ピジン日本語》
Good day	Ohio (おはよう)
I wish to see some nice small curios.	Your a shee cheese eye curio <sup>5)</sup> (よろしい、小さいキュリオ high kin. <sup>6)</sup> 「骨董品」を拝見します)
Of what kind and quality?	Nanney arimas? <sup>7)</sup> (なに「どんなもの」ですか?)
Something exceptionally nice.	Num wun your a shee arimas? <sup>8)</sup> (一番いいものがありますか?)
Would you like to see some old Satsuma screens of wonderful variety and strong pattern?	Die job screen high kin arimas? <sup>9)</sup> (良質の屏風 <small>びょうぶ</small> をご覧になり ますか?)
Yes, I should be pleased to look at them.	Sigh oh, high kin arimas <sup>10)</sup> (そうですね、拝見しましょう)
How much is this small inlaid tray?	Cheese eye ickoorah? <sup>11)</sup> (この小さいものはいくらですか?)
It is twenty dollars.	Knee jew dora. (20 ドルです)
I will give you two boos.	Knee boos arimas (2 ブースあります)

You are very hard upon a  
poor merchant but it is  
yours for the sake of  
future business.

Your a shee.  
(よろしいでしょう)

Will you not take 1 Yen for  
the article? I am an  
influential man and can put  
many thousand dollars  
worth of business in your  
way.

Ichi rio sinjoe arimas,<sup>12)</sup>  
(一両を払います)  
watarkshe oki akindo,  
(私は金持ちの商人です)  
tacksan cow.  
(たくさん買いますよ)

練習問題： 1) 英語の文章 (18 種類) を日本語 (横浜方言) に置き換える (翻訳する) 問題で、次にその一部を紹介する。

1. Will you go with me into the shop?
2. No, my dear fellow; I do not want to go in.
3. I think I have lost a fifty-cent piece in this small shop.
4. Who is in the shop now? The bootmaker or his wife?
5. There is only his assistant in the shop.
6. Is not a "store" another name for a "shop."
7. Yes; they now say in Yokohama, I keep a "store," not, I keep a "shop."
8. Take off your hat when you enter a shop.
9. I have been told that you do not take off your hat when you enter a drawing-room.
10. Always take off your hat when you enter a drawing-room.

2) 3段落からなる日本語(横浜方言)の文章を、英語に置き換える(翻訳する)問題で、次にその第1段落を紹介する。

Oh my nangeye tokey high kin nigh. Die job arimas? Jiggy-jig oh  
(おまえ、ながいとき はいけん ない。だいじょうぶ あります?)  
[あなた長い間会っていないね。大丈夫かい?]

char motty koy, donnyson arimas. Doko maro maro? Nanny house  
(じきじき おちゃ もってこい。だんなさん あります。どこ ま  
ろまる)

[すぐにお茶を持ってきなさい。旦那さんがいるよ。どこに行っている?]

arimas? Anatter tempo sinjoe. Tempo arimasen. Ah me arimas?  
(なにハウスあります。あなた てんぼう しんじょう。てんぼう  
ありません。あめ あります?)

[どの家ですか。あなたお金をあげて。お金はありません。雨ですか?]

Ah me kass arimasen, Ginricky pshaw motty koy—ginricky pshaw  
(あめ かさ ありません、りくしょう もってこい—りくしょう)  
[雨傘がありません。人力車を呼びなさい。人力車がいません。]

arimasen, mar motty koy! Mar sick-sick, betto drunky drunky, koora  
(ありません、まあ もってこい! まあ シックシック、べっとう  
ドランキー ドランキー、くら セランパン。)

[馬を呼べ。馬は病気で、馬丁は酔っ払っていて、鞍も壊れています。]

serampan. Oh my piggy jiggy jig, watarkshee pumgutuz sinjoe arimas.  
(おまえ ピギー じきじき、わたくし ぶんぐつ しんじょう あ  
ります。)

[お前はすぐに消えうせろ。そうでないと、私はおしおきをするよ。]

「南京風日本語表現」：編者である Bishop of HOMOCO (Hoffman

Atkinson) が、彼自身の旧友であり同輩の大学 OB でもあった香港の植民地の司法長官 Mr. Ng Choy 氏の要請<sup>13)</sup>により収録されたもので、横浜でのピジン日本語と中国系の人々の使っていたピジン日本語との間に多少のずれがあることを指摘している。

例えば、英語を母語とする英米人たちは Walk-karrymasing とか Walk-kawymasing のつづりにみられるように、語中の母音直後の / r / を発音したりしなかったりするが、中国系の人々は、音素 / r / を / l / に変えて発音するので、それがつづり字に反映され、Walk-kallimassing となる。また同様に、Arimas (あります) も Allo (ある) となる。

また、数詞や各種表現についても次のように、語尾などの発音が微妙に異なる。

【数詞】

	《英語》	《英米人のピジン日本語》	《中国風ピジン日本語》
One		Stoats	Shtots' hi
Two		Stats	Fu' tarch
Three		Meats	Meachi
Four		Yotes	Yoh-tchi
Five		It suits	Itsuitchi
Six		Moots	Mootchi or loku
Seven		Nannats	Sitchi
Eight		Yachts	Yartchi
Nine		Cocoanuts	Kokarnotchi
Ten		Toe	Toe, or jew
Twenty		Knee jew	Knee jew



【文例】

《英語》	《英米人のピジン日本語》	《中国風ピジン日本語》
Twice two are four.	Stats stats yotes narimas	Fu' tarchi fu' tarchi yohtchi aloo.
I should like to borrow 500 Yen from you if you have them.	Go-hakku rio high shacko.	Anatta go-hakku lio aloo nallaba watark-koo lack' shee high shacko dekkelloo aloo ka?

さらに、Wok-kallonai（分からない）と Wok-kallimassing（分かりません）の微妙な使い分け（前者に比べ、後者の方がややあいまいな返答）が、例えば次のように解説されている。

《Wok-kallonai》

I don't / I won't / I shan't / I didn't / I never intended to and nothing you can say will make me	} understand
--	--------------

《Wok-kallimassing》

It answers my purpose to say that I do not It is simply a question of Mexicans and if you make it worth my while I will very quickly	} understand
---	--------------

2. 明治維新の横浜方言（英語系ピジン日本語）のつづり字による発音表記の分析

## 2. 1. 日本語をそのままローマ字化したもの

欧米人の耳に聞こえた発音や、それを欧米人が発音する際の実際の発話音が必ずしも正確な日本語の発音であるとは限らない。発音の際に母語の干渉があったり、異なる言語間の音素体系の違いにより聞き取りにくい音素や音の連続が多々あるからである。そのようにして生じた発音のずれが、つづり字にそのまま反映されることが多く、その中には言語接触に共通して見られる母音の長短や音質の変化、母音直後の / r / 音、子音の代用（変化）、語尾屈折（接尾辞）・助詞の脱落などが散見される。

Watarkshee/ Watarkoosh（<わたくし「私」= I）、Acheera sto（<あちらのひと「人」= he, his, theirs）、Caberra mono（<かぶりもの「被り物」= hat）、Tempo（<てんぽ「天保銭」= Penny）、Arimas（<あります「～であります」= to have, will have, has had, can have, to obtain, to be, to wish to be, to be at home, to arrive, to want, etc.）、Donnasan（<だんなさん「旦那さん」= Master）、Anattar（<あなた「貴方」= Master）、Nigh（<ない「～ではない」= no）、Hontoe（<ほんとう「本当に」= really）、Ooso（<うそ「嘘」= mistaken）、Todie mar（<ただいま「ただ今」= immediately）、Foorachi-no-yats（<ふらちなやつ「不埒な奴」= loafer）、Walk-arimasen（<わかりません「分かりません」= not to understand）、Arimasen（<ありません「有りません、在りません」= not to have, to be out）、Tack san（<たくさん = much）、Ikoorah?（<いくら? = How much?）、Yotes（<よっつ「四つ」= four）、Rowku（<ろく「六」= six）、Nannats/ Sitchi（<ななつ / しち「七つ」= seven）、Tokey（<とけい / とき「時計 / 時」= time）、sto（<ひと「人」= a man）、Berrobo-yaru（<べらぼう（な）やろう = a 'bad hat'）、abake mono（<お化けもの = ghost）、ooshie（<うし「牛」= cattle）、Okee（<

おおきい「大きい」 = big)、Fooney (くふね「船」 = ship)、rosokoo (くろうそく「蠟燭」 = candle)、Meeds、(くみず「水」 = water)、Motty koy (くもってこい「持って来い」 = bring)、Doko (くどこ = where)、Kooroy (くくろい「黒い」 = black)、Atsie (くあつい「暑い」 = hot)、Sammy (くさむい「寒い」 = cold)、Hanash (くはなす「話す」 = to speak, to say, to tell)、Dalley (くだれ「誰」 = who)、Aboorah (くあぶら「油」 = butter, oil, kerosen, pomafum, grease)、Bakar (くばか「馬鹿」 = a slow servant)、Coots (くくつ「靴」 = boot)、Coots pom pom otoko (くくつぽんぽんおとこ「靴ポンポン男」 = bootmaker 「靴屋」)、Takusan hanash bosan (くたくさん はなし ほうさん「たくさん話をする坊さん」 = officiating priest「司祭」)、Kashy (くかし「菓子」 = cakes)、Oh Kashy (くおかしい「可笑的い」 = ridiculous/ laughable)、Sendoe (くせんどう「船頭」 = boatman/ boatmen)、Cassie (くかぜ「風」 = wind)、Matty/ Skoshe matty (くまてい / すこしまてい「待てい / 少し待てい」 = Wait!)、Cad gee (くかじ「火事」 = conflagration)、Sinjoe (くしんじょう「進上」 = give)、Mar key tobacco (くまきたばこ「巻きタバコ」 = cigar)、Sacky (くさけ「酒」 = wine)、Enakka (くいなか「田舎」 = country)、Kommysan (くかみさん「女将さん」 = lady)、Nammai kammy (くなまえ (の) かみ「名前の紙：名刺」 = card)、Ah booneye (くあぶない「危ない」 = take care 「気を付けて」)、shiroy (くしろい「白い」 = white)、Ah Kye (くあかい「赤い」 = red)、Tack eye (くたかい「(値段が) 高い」 = dear)、Minner minner (くみんな みんな「皆皆」 = all)、Onadge kote/ Onadge kotoe (くおなじこと「同じこと」 = the same)、Ah Kye sacky (くあかいさけ「赤い酒」 = Claret 「赤ワイン」)、Matty toky (くまってとけい「待って時計」 = Stop watch 「ストップウォッチ」)、ooshee (くうし「牛肉」 = beef)、Ooshee chee chee (うし (の) ちち「牛の乳」 = fresh

milk)、Coots (＜くつ「靴」 = shoes/ boots)、Kammy (＜かみ「紙」 = paper)、Okee abooneye pon pon (＜おおきい あぶない ポンポン「大きい危ないポンポン」 = earthquake)、Coachy (＜こっちへ = here)、Coachy weedy (＜こちへおいで = Come here)、D\_\_atty (＜だまって = Be quiet!)、Baby san bashaw (＜ベイビーさんばしゃ「ベイビーさん (の) 馬車; 乳母車」 = perambulator)、Kooromar / Bashaw (＜くるま / ばしゃ「車 / 馬車」 = carriage)、Gin ricky-pshaw (＜じんりきしゃ「人力車」 = man-power carriage)、Mar gin ricky-pshaw (＜うまじんりきしゃ「馬人力車」 = Two-wheeled pony carriage)、Betto (＜ばてい「馬丁」 = groom)、Koorah (＜くら「鞍」 = saddle)、Cootsoo wah (＜くつわ「轡」 / 馬ろく) = bridle)、Abi omir (＜あぶみ「鐙」 = stirrup)、Neigh dan (＜ねだん「値段」 = price)、Koorah (＜くら「蔵」 = godown / place to store packages)、Ato mono (＜あとももの「後物」 = crupper「尻がい (馬具)」、Obee (＜おび「帯」 = girth「(馬の) 腹帯」、Kireen (＜きれい「綺麗」 = clean)、Kooromar (＜くるま「車」 = wheel)、Heebatchey / Sheebatchey (＜ひばち / しばち「火鉢」 = stove)、Yakemas (＜やきます「焼きます」 = roast)、Tates yakemas (＜てつやきます「鉄で焼きます」 = fry)、Tomago (＜たまご「卵」 = eggs)、Eemo (＜いも「芋」 = potato)、Sara (＜さら「皿」 = plate)、Shiroy mono (＜しろいもの「白い物」 = starch「澱粉 (でんぷん)」、Kimmono (＜きもの「着物」 = clothes)、Sin turkey (＜せんたく「洗濯」 = wash)、Atarashee (＜あたらしい「新しい」 = clean, new)、Toe (＜とう; 戸「ドア」 = door)、Akemas (＜あけます「開けます」 = open)、Mon (＜もん「門」 = gate)、hash ero (＜はしろ「はしご」 = stair-case)、Koong-ee (＜くんぎ「釘 (くぎ)」 = nail)、Atsie (＜あちい「熱い、暑い」 = hot)、Sammy (＜さみい「寒い」 = cold)、Sammy needs (＜さみい みず「寒い水」 = cold water)、Ah me kass (＜

あみいかす「雨傘(あまがさ)」= umbrella (for rain)、Tent sam kass (＜てんとうさんかす「天道さん傘:日傘(ひがさ)」= umbrella (for sun)、Bosan (＜ぼうさん「坊さん」= clergyman)、Yakkamash shto (＜やかまししと「やかましい人」= ambassador)、Selly shto (＜せりひと「競りの人」= auctioneer)、Eeto high kin sto (＜いとはいけんひと「糸を拝見する人」= silk inspector)、Oh char chobber chobber sto (＜おちゃちょばちょばひと「お茶をチョバチョバする人」= tea inspector)、Akindoe (＜あきんど「商人」= merchant)、Dyke oh (＜だいくおー「大工」= carpenter)、Ah kye kimono sto (＜あーかいーきものひと「赤い着物の人」= soldier (兵士))、Amah (＜あま = nursemaid (子守女))、Chi chi Amah (＜ちちあま「乳あま」= foster mother (養母))、Nankinsan (＜なんきんさん「南京さん」= Chinaman (中国人))、Kurrumboh (＜くるんぼう「黒ン坊」= gentleman of color (黒人男性))、Nin soaker (＜にんそうかー「人足」= coolie (クーリー:かつてインド・中国などの日雇い人夫))、Eijin san (＜いいじんさん「異人さん」= foreigner)、等。

## 2. 2. 日本語の発音に似た英単語・音節を組み合わせたもの

日本語の単語や句表現とまったく同じ発音を持つ英語の単語や句表現を探すことは至難の業だが、よく選択されており、著者の機転とアイデアが反映されている。と同時に、Post-vocalic/r/ や語尾・子音直後の母音脱落など当時の欧米人の母語を反映した日本語の発音の特徴が随所に見られ、子音と母音で構成される個々の音節の一部の発音を必要以上に強調したり、伸ばしたり(短母音の長母音化や母音・子音の変質化(代用)、等)、日本語の子音と類似した英語の子音で代用するなど、世界各地に見られるピジン・クレオールの子音的特徴にも似ていて、言語接触に共通の普遍性をうかがわせる。

Oh my (〈おまえ = you)、Nang eye chapeau (〈ながいシャツポ「長いシャツポ」 = stove pipe hat (《米》 silk hat)、Oh my tempo (〈おまえ (の) てんぽ「お前の天保銭」 = your penny)、Mar key (〈まき「薪」 = firewood)、Oh char (〈おちゃ「お茶」 = tea)、Am buy worry (〈あんばいわるい「塩梅(が)悪い」 = illness, sick)、Die job (〈だいじょうぶ「大丈夫」 = unmistakably, without fail)、Jiggy-jig (〈じきじき「じきに、すぐに、急ぐ」 = to hasten)、Ohio (〈おはよう = Good morning, Good day, How do you do?, Good evening)、Sigh oh narrow (〈さようなら = Good bye)、Sigh oh (〈さよう = yes)、Moods cashey (〈むずかしい「難しい」 = difficult)、Nigh (〈ない「～ない」 = not)、Your a shee (〈よろしい = Good, All right)、Worry (〈わるい「悪い」 = bad)、Skoshe / Choese eye (〈すこし / 小さい = little)、Stoats (〈ひとつ「一つ」 = one)、Stats (〈ふたつ「二つ」 = two)、Meats (〈みつつ「三つ」 = three)、It suits (〈いつつ「五つ」 = five)、Moots (〈むつつ「六つ」 = six)、Yachts (〈やつつ「八つ」 = eight)、Cocoanuts (〈ここのつ「九つ」 = nine)、Toe (〈とお「十」 = ten)、High kin (〈はいけん「拝見」 = to see)、Nang eye (〈ながい「長い」 = long)、Moose me (〈むすめ「娘」 = a woman)、Die job (〈だいじょうぶ「大丈夫」 = strong, well)、Nanny (〈なに「何」 = what)、Eel oh (〈いろ「色」 = colour)、Start here (〈したてや「仕立て屋」 = tailor)、Oh terror (〈おてら「お寺」 = church)、Tongs (〈たんす「箆笥」 = cabinet)、Back harry (〈ぼっかり = only)、Cheese eye coots (〈ちいさいくつ「小さい靴」 = slippers)、Ah me (〈あめ「雨」 = rain)、Tad sooner (〈たづな「手綱」 = reins)、Oh you (〈おゆ「お湯」 = hot water)、Tory (〈とり「鳥」 = chicken)、Dye (〈だい「台」 = table)、A row (〈あらう「洗う」 = to wash)、She merro (〈しめろ「閉めろ」 = shut)、She buyer (〈しばいや「芝居屋」 = theatre)、等。

### 2.3. 古い(当時の)日本語表現を反映するもの

明治維新が舞台であるから、当時の人々の日常生活、風俗、習慣などを反映する用語や、表現が多く見られるのは当然のことであるが、個々の単語や表現の発音が本来の横浜の日本語からは微妙にずれており、欧米人の母語の発音の影響や、英語と違う日本語独自の子音や母音の発音及びその連結形の聞き間違えなどがそのまま「化石化 (fossilized)」し、定着していると思われる例がかなりある。

Caberra mono (＜かぶりもの「被り物」 = hat)、Acheera sto (＜あちらひと「あちらの人」、Nangeye chapeau (＜ながいしゃっぽ「長いシャッポ」 = Stove pipe hat 《米》 silk hat)、Tempo (＜てんぽ「天保銭」 = penny)、Sigh oh (＜さよう = yes)、Feeratchi-no-yats (＜ふらちなやつ「不埒な奴」 = loafer)、Your a shee (＜よろしい = good, all right)、High kin (＜はいけん「拝見する」 = to see)、Berrobo-yaru (＜べらぼうやろう「べらぼう(な)やろう」 = a 'bad hat')、Matty (＜まてい「待てい」 = Wait!)、Sinjoe (＜しんじょう「進上する」 = to give)、Gin ricky-pshaw (＜じんりきしゃ「人力車」 = man-power carriage)、Betto (＜ばてい「馬丁」 = groom)、Koorah (＜くら「鞍」 = saddle)、Cootsoo wah (＜くつわ「轡、馬ろく」 = bridle、Abi omir (＜あぶみ「鐙」 = stirrup)、Tadsooner (＜たづな「手綱」 = reins)、Koorah (＜くら「蔵」 = godown, place to store packages)、Tent sam kass (＜てんとうさまかす「天道様傘」 = umbrella (sun))、等。

### 2.4. 英語以外の外国語を反映するもの

特に、欧米人や中国人との交流の中で生まれた中国系ピジン英語の影響や、英米人以外の外国人や、それ以前に日本人と交流のあった外国人(オ

ランダ人やポルトガル人)の母語の影響も見られる。

Nang eye chapeau (〈ながいしゃっぽ『《仏》長いシャッポ』 = stove pipe hat《米》silk hat)、Champone (〈ちゃんぽん『《中》攪和：chān huò (hé) チャンポン = to mix』、pan (〈《ポルトガル語》パン pao = bread)、Bricky chee chee (〈ぶりきちち『ブリキ缶の乳』：《オランダ語》blik [薄い銅板に錫(すず)をめっきしたもの] = canned milk)、champon ooshee (〈ちゃんぽんうし『チャンポン牛』 = hash [ハヤシ肉料理：肉と野菜を細かく切ったもの])、champon yakemas (〈ちゃんぽんやけます『チャンポン焼けます』 = stew)、Shabone (しゃぼん『《ポルトガル語》シャボン：石鹸』 = soap)、等。

## 2.5. 英単語を混用したもの

この種の例は、英語と日本語の混用であり、まさに「英語系ピジン日本語」本来の実例といえよう。おおむね、1) 単独型 (Charms, Num wun, etc.)、2) 繰り返し型 (Sick-shick, bynebai, etc.)、3) 複合語 (接辞) 型 (Jones-san, Baby san, Doctorsan, etc.) に分類が可能である。また、この種の例は、世界各地で使われている接触言語、英語系ピジン・クレオール語に共通した特徴でもあり、その構成や品詞の組み合わせの特徴についてさらに調査を重ね、当該言語独自の特徴と、英語系ピジン・クレオールに共通した普遍的特徴の分類・分析が必要となろう。

Boto (〈ぼーと『ポート、船』 = boat)、Charms arimas? (〈チャーむあります?『チャーム(は)あります(か)?』 = Do you keep small inlaid ivory charms for sale here?)、Jones-san arimas? (〈じょーんずさんあります?『ジョーンズさん(は)ありますか/おられますか?』 = Is



Mr. Jones at home?)、Sick-sick (くしつくしつく「シック シック」= illness)、Bynebai (くばいばい「バイバイ：近いうちに、そのうちに」= By and bye)、Baby san (くべいびーさん「ベイビーさん」= a child)、Boy (くぼーい「ボーイ」= a servant)、Num wun sindoe (くなんわんせんどう「ナンワン (ナンバーワン) (の) 船頭」= the captain)、Mar key tobacco (くまきたばこ「巻きタバコ」= a cigar)、Dalley house arimas? (くだれ はうす あります? 「誰 (の) ハウス (で) ありますか?」= Whose house is this?)、Beer sacky (くびあさけ「ビア酒」= beer)、Baby san bashaw (くべいびーさんばしゃ「ベイビーさん (の) 馬車」= Perambulator)、Kooksan (くこっくさん「コックさん」= cook)、Doctorsan (くどくたーさん「ドクターさん」= physician)、So so (= to sew)、等。

## 2. 6. 擬音 (態) 語を使用したもの

擬音語、擬態語の多用は、後述の「音節・単語・句表現などの繰り返し表現」と共に、世界各地に見られる英語系ピジン・クレオールの大らかな特徴の一つである。さらに実例を多く収集して、この種の用法の言語環境や文脈、対象となる事象の特徴などを分類分析する必要がある。

Oh char parra parra (くおちゃばらばら「お茶 (を) パラパラ (してください)」= Mix me some tea)、Coots pom pom otoko (くくつぽんぽんおとこ「靴ポンポン男」= bootmaker「靴屋」)、Okee abooneye pon pon (くおおきいあぶないぽんぽん「大きい危ないポンポン」= earthquake「地震」)、chobber chobber (く《中》吃吧, 吃吧 (Chība, Chība) = food)、Para-para (くぱらぱら「パラパラ」= boil)、Oh char chobber chobber sto (くおちゃちょばちょばひと「お茶をチョバチヨバする人」= tea inspector)、等。

## 2.7. 日本語の助詞が脱落している表現例

この教則本では、所有格をはじめ他の「格」を示す格変化形に相当するものがなく、容易に単語を並べるだけで、「核」の表現をしていることを指摘している。(15頁)次に示す例はほんの一部に過ぎないが、語句や文のレベルでの表現では、日本語でその役割を果たすべき助詞がほとんど使われていない。また、助詞を名詞句の語尾に付加される一種の屈折語尾とみなせば、その脱落は、世界各地にみられるピジン・クレオールに共通の特徴とみることも可能である。

Acheera sto caberra mono (＜あちらひとかぶりもの「あちらのひとの被り物 = his hat)、Oh my tempo (＜おまえてんぼう「お前の天保銭」 = your penny)、Watakshee mar (＜わたくしうま「私の馬」 = my horse)、Watakshee boto (＜わたくしぼと「私たちのボート」 = our boat)、Oh my oh char (＜おまえおちゃ「お前のお茶」 = your tea)、Mar arimas? (＜うまあります? 「馬が (は) ありますか?」 = Have you a horse?)、Tempo arimas (＜てんぼうあります「(かれには) 天保銭があります」、Boto arimas? (＜ぼととあります? 「ボートはありますか?」 = Will you have a boat?)、Charms arimas? (＜チャーむあります? 「チャーム (お守り) はありますか?」 = Do you keep small inlaid ivory charms for sale here?)、Jones-san arimas? (＜じょんずさんあります? 「ジョーンズさんはありますか (おりますか)?」 = Is Mr. Jones at home?)、Watakshee am buy worry oh char parra parra (＜わたくしあんばいわるい お茶パラパラ「私は塩梅が悪いので、お茶をパラパラしてください。」 = I feel ill, mix me some tea)、等。

## 2.8. 多義語的用法例

少ない語彙を駆使してできるだけ多くの表現を可能にするためには、多義語が必須である。後述の「音節・語句の繰り返し表現」や「擬音語・擬態語」と同様に、多義語の多用もピジン・クレオール的重要な特徴であり、一般庶民のコミュニケーションには欠かせない特徴の一つと言える。また、多義語を使った表現活動は極めて有効な学習方法でもあり、この種の教則本には欠かせない要素と言えよう。

Arimas (＜あります = to have, will have, has had, can have, to obtain, to be, to wish to be, to be at home, to arrive, to want, etc.)、Piggy (＜ぴぎ = to remove, take away, carry off, clear off, clear the table, get out of the road, go out, etc.)、Ohio (＜おは (い) よう = How do you do?, Good morning, Good day, Good evening, etc.)、Aboorah (＜あぶら = butter, oil, kerosene, pomatum (pomade), grease, etc.)、maro maro (＜まるまる = to pass, to walk, to be not at home, cause ~ to trot, to go around, go out, etc.)、Jiggy-jig (＜じぎじぎ「直々(に)、すぐに、急ぐ」 = to hasten, hurry, be quick, quickly, fast, etc.)、等。

## 2.9. 語句・音節の繰り返し例

前述の「擬音語・擬態語」と同様に、音節や語句の繰り返し表現は、少ない語彙や表現という制約の中で、表現を豊かにするための有効な手段といえる。だからこそ、世界で広くおこなわれている様々な英語系ピジン・クレオールに共通した特徴でもあるわけで、すでに述べたように、繰り返す要素(音節・単語・句表現など)の分類と分析、使われる文脈や言語環境、表現される対象となる事象の分類・分析が今後必要であろう。

Sick-sick (＜しっくしっく「シックシック」 = illness)、parra parra (＜

ばらばら「パラパラ混ぜる」= to mix)、Jiggy-jig (くじぎじぎ「直々(に)、すぐに、急ぐ」= to hasten, hurry, be quick, quickly, fast, etc.)、Coots pom pom otoko (くつぽんぽんおとこ「靴ポンポン男」= bootmaker)、maro maro (くまろまろ = to pass, to walk, to be not at home, cause ~ to trot, to go around, go out, etc.)、Chobber chobber (くちよばちよば「中国人と欧米人の間でのピジン英語に由来《中》吃吧、吃吧 (Chība, Chība) = food, sustenance)、pom pom (くぽんぽん「ポンポン」= hammer)、Minner minner (くみんなみんな「皆皆」= all)、Ero-ero (くいろいろ「色々」= great variety)、High high mar (くはいはいうま「ハイハイ馬」= racing pony)、Ooshe chee chee (くうしちち「牛の乳」= fresh milk)、Okee abooneye pon pon (くおおきいあぶない「大きい危ないポンポン」= earthquake)、Oh char chobber chobber sto (くおちゃちよばちよばひと「お茶をチョバチョバする人」= tea inspector)、等。

## 2. 10. 日本語の母音や音節を脱落させたもの

欧米人の耳に聞こえた日本語の中で、強勢のない音節が弱化して聞こえ、脱落したり、日本語の発音に類似した英語の単語を選択する場合に生じた不正確さなどに起因するものが多い。

Mar (くまー「うま」= horse)<sup>14)</sup>、Bynebai (くばいねばい「バインバイ」= by and bye)、Sammy (くさみい「寒い」= cold)、Coachy weedy (くこちういでい「こっちへおいで」= Come here)、Worry (くわりい「悪い」= not strong)、Ah me kass (くあめがす「雨傘」= umbrella)、Tent sam kass (くてんとうさむかす「天道様の傘」= umbrella (for sun))、Yakkamash shto (くやかまししと「やかましい人」= ambassador)、等。

## 2. 11. 誤用法と思われる例：標準日本語から逸脱していると思われる用法

この教則本では、「横浜方言では、代名詞の単数と複数の区別が存在しない（15頁）」と指摘しているが、当時の横浜方言にその区別がなかったというよりは、むしろ、英語を母語とする欧米人と横浜に住む日本語を母語とする日本人との間で交わされた「英語系ピジン日本語」で、この種の区別がなかったと考えるべきであろう。また、形容詞の使い方に問題のある例もあった。「寒い水（Sammy meeds）」は cold water として使われていたが、日本語の「寒い」と英語の cold の意味範疇のずれから生じた誤用法といえよう。

Watarkshee or Watarkoosh domo（<わたくしども「私ども」= mine or ours ⇒ my or our）、Oh my（<おまえ = yours ⇒ your）、Acheera sto（<あちらひと「あちらのひと」= his or theirs ⇒ he、Sammy meeds（<さみいみず「寒い水」= cold water）、等。

## 2. 12. 不明な例

So so（<? = to sew, to mend, to make clothes）、Piggy（<? 《中》避开（開）(bì kāi) =to remove, take away, carry off, clear the table, get out of the road)<sup>15)</sup>、Serampan（<? = to break）、Come here（<? = a dog）、Chobber chobber（<? 《中》吃吧、吃吧（Chība, Chība）= food, sustenance）、Bobbery（<? = noise, disturbance）、pumpgutz（<? = punish (ment)）、等。

（この稿続く）

## 《注》

- 1) 正式には、*Revised and Enlarged Edition of Exercises in the Yokohama Dialect. Twenty Second Thousandth. Revised and Corrected at the Special Request of the Author by the Bishop of HOMOCO. Yokohama, 1879.* と表紙に表記されている。また、中表紙には、“Exercises in the Yokohama Dialect.” Second Edition. To Professor Max Muller, and John Grigor, Esq This Work is Dedicated. とある。なお、1953年に東京のタトル社 (the Charles E. Tuttle Co.) から復刻版が出版されている。Professor Friedrich Max Muller (1823–1900) はドイツに生まれ、イギリスに帰化した東洋学者、比較言語学者。ベルリン大学からパリに移り、印欧比較言語学の権威 E. ビュルヌフに師事。イギリスに渡って、1850年オックスフォード大学教授となる。古代東洋文化、特にインド学において、科学的批判的学問研究の基礎を築いた。主著に『東方聖書 (*The Sacred Books of the East*)』50巻 (1879–1910)、『インド六派哲学 (*The Six Systems of Indian Philosophy*)』(1899)がある。また、John Grigor, Esq は横浜方言に精通しており、この教則本作成の際の資料提供者である。
- 2) Hoffman Atkinson のペンネーム。この序文の最後に、‘Given at our Palace. The 31st day of March, 1879, the 13th year of Meiji, Second cousin of Jimmy Tenno.’ とある。自分を神武天皇の縁者と称するこの HOMOCO 氏は並はずれたユーモアの持ち主と見るべきか、あるいは当時の日本文化を揶揄しているのか、いずれにしても当時の西洋人知識層に特有の日本文化観の一端が窺われる。
- 3) James Hepburn (1815–1911) は、アメリカ長老派の医療宣教師で、日本名は平文。1859年来日し、横浜で開業し、神奈川に施療所を設けた。1867年に、『和英語林集成 (*A Japanese and English Dictionary*)』を刊行。幕末から明治初期にかけての日本語の重要な資料になっている。第3版 (1886) から、ヘボン式ローマ字によるつづり字が採用された。
- 4) 教則本作成の資料提供者として、横浜方言に精通していた John Grigor, Esq を指す。(注1) 参照)
- 5) Your a shee (よろしい)、cheese eye (小さい)、curio < curiosity 「骨董品 (こっとうひん)、珍しい美術品」: 日本語文の中で英語を混用してい

る例で、英語系ピジン日本語の大きな特徴の一つと言える。(類例については、2.5. を参照のこと)

- 6) **high kin** (拝見 (します))
- 7) **Nanney** (なに (が))、**arimas?** (ありますか) : この **arimas** は「所有 (現在形、未来・過去完了)・取得・存在・願望・到着」など様々な意味を持ち得る多義語である。この種の多義語の存在は世界各地の接触言語、ピジン・クレオールに共通した特徴といえる。
- 8) **Num wum** (< **number one** = ナンバーワン 「最高の」)、**Your a shee** (よろしい、良質の)
- 9) **Die job** (大丈夫、品質の良い)、**screen** (屏風、ついたて)
- 10) **Sigh oh** (さよう、そうですね = **yes**)
- 11) **Cheese eye** (小さい (物))、**ickoorah ?** (いくらですか?)
- 12) **Ichi rio** (一両)、**sinjoe** (進上 = さしあげます)
- 13) この要請は、当時、**Churchwood Estates** 農園を改善する目的で起こされた訴訟において、横浜の裁判所が下した判決に対し上訴すべきかどうかについて、**Mr. Ng Choy** 氏が 大英帝国政府から相談を受けたことと関連しているという。(「改訂版への序文」9頁)
- 14) **Mar** の発音とつづり字については、「馬」の中国語発音の影響の可能性もある。
- 15) **hiki** (引き) に由来し、**biki/piki** に転化し (ex. **jibiki** (字引))、/g/ が有音化して /k/ となり、**Piggy** に至った可能性がある。

◎本研究は成城大学特別研究助成金『現代英語の合理性と普遍性に関する実証的研究』の助成を受けており、ここに記して謝意を表す。また資料を提供して下さった鈴木恭史氏に深く感謝するものである。

#### 《参考文献》

- Arends, Jacques, Pieter Muysken and Norval Smith. eds. 1995. *Pidgins and Creoles: An Introduction*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Atkinson, Hoffman. ( Bishop of HOMOCO) 1879. *Revised and Enlarged Edition*

- of Exercises in the Yokohama Dialect*. Yokohama: "Japan Gazette" Office.
- Davies, Diane. 2005. *Varieties of Modern English: An Introduction*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Gorlach, Manfred. 1991. *Englishes: Studies in Varieties of English 1984–1988. Varieties of English Around the World*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Hall, Robert. 1966. *Pidgin and Creole Languages*. Ithaca: Cornell University Press.
- Holm, John. 1989. *Pidgins and Creoles Vol. II Reference Survey*. Cambridge: Cambridge University Press.
- \_\_\_\_\_. John. 2000. *An Introduction to Pidgins and Creoles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mühlhäusler, P. 1982. "Tok Pisin in Papua New Guinea." In Bailey and Gorlach (eds) 1982: 439–466
- Sebba, Mark. 2007. *Spelling and Society: The Culture and Politics of Orthography around the World*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, Larry E. and Michael L. Forman. 1997. *World Englishes 2000. Literary Studies East and West*. Honolulu: University of Hawai'i.
- Wells, J. C. 1982. *Accents of English*, vols I – III. Cambridge: Cambridge University Press.
- 池田雅之、矢野安剛編（2006）『ヨーロッパ世界のことばと文化』成文堂。
- 河原俊昭、山本忠行編（2004）『多言語社会がやってきた』くろしお出版。
- 杉本豊久（1985）「ピジンとは何か、クレオールとは何か」『言語』Vol.14, No.11 大修館書店、40–44 頁。
- \_\_\_\_\_.（2001）「爆発する英語：グローバル英語の時代」『英語教育』Vol.50, No.2 大修館書店、11–13 頁。
- \_\_\_\_\_.（2008a）「Tok Pisin のつづり字法・語彙・句表現－その単純化と合理性－」『成城イングリッシュ モノグラフ』第 40 号、成城大学大学院文学研究科 117–193 頁。
- \_\_\_\_\_.（2008b）「世界のピジン・クレオール英語－言語接触の諸相－」矢野安剛・池田雅之編『英語世界のことばと文化』成文堂、263–285 頁。
- \_\_\_\_\_.（2009a）「現代英語の変異性－トク・ピシン、ジャマイカン・クレオー



ルおよびグラスゴー方言の音韻とつづり字の比較（1） -」『成城大学共通教育論集』第1号、59-79頁。

\_\_\_\_\_ . (2009b) 「日英語の変異性 - 英語変種のつづり字表記と日本語カタカナ表記の比較分析 -」『成城文藝』第208号、83-117頁。